

遠野物語

柳田国男

+ 目次

「# ページの左右中央」

この書を外国に在る人々に呈す

「# 改ページ」

この話はすべて遠野（とおの）の人
佐々木鏡石君より聞きたり。昨（さく）明
治四十二年の二月ごろより始めて夜分おり
おり訪（たず）ね来（き）たりこの話をせ
られしを筆記せしなり。鏡石君は話上手
（はなしじょうず）にはあらざれども誠実

なる人なり。自分もまた一字一句をも加減
（かげん）せず感じたままを書きたり。
思うに遠野郷（ごう）にはこの類の物語な
お数百件あるならん。我々はより多くを聞
かんことを切望す。国内の山村にして遠野
よりさらに物深き所にはまた無数の山神山
人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて
平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは
陳勝呉広（ちんしょうごこう）のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。
花巻（はなまき）より十余里の路上には町
場（まちば）三ヶ所あり。その他はただ青
き山と原野なり。人煙の稀少（きしょう）
なること北海道石狩（いしかり）の平野よ
りも甚（はなは）だし。或いは新道なるが
故に民居の来たり就（つ）ける者少なきか。
遠野の城下はすなわち煙花の街なり。馬を
駅亭の主人に借りて独（ひと）り郊外の
村々を巡（めぐ）りたり。その馬は黔（く

ろ)き海草をもつて作りたる厚総(あつぶ
さ)を掛(か)けたり。虻(あぶ)多きた
めなり。猿(さる)ケ石(いし)の溪谷は
土肥(こ)えてよく拓(ひら)けたり。路
傍に石塔の多きこと諸国その比を知らず。
高処より展望すれば早稲(わせ)まさに熟
し晩稲(ばんとう)は花盛(はなざか)り
にて水はことごとく落ちて川にあり。稲の
色合(いろあ)いは種類によりてさまざま
なり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色の
同じきはすなわち一家に属する田にしてい
わゆる名処(みょうしょ)の同じきなるべ
し。小字(こあざ)よりさらに小さき区域
の地名は持主にあらざればこれを知らず。
古き売買譲与の証文には常に見ゆる所なり。
附馬牛(つくもうし)の谷へ越ゆれば早池
峯(はやちね)の山は淡く霞(かす)み山
の形は菅笠(すががさ)のごとくまた片仮
名(かたかな)のへの字に似たり。この谷

は稲熟することさらに遅く満目一色に青し。
細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて
雛（ひな）を連（つ）れて横ざりたり。雛
の色は黒に白き羽まじりたり。始めは小さ
き鶏かと思いが溝（みぞ）の草に隠れて
見えざればすなわち野鳥なることを知れり。
天神の山には祭ありて獅子踊（ししおど
り）あり。ここにのみは軽く塵（ちり）た
ち紅（あか）き物いささかひらめきて一村
の緑に映じたり。獅子踊というは鹿（し
か）の舞（まい）なり。鹿の角（つの）を
つけたる面を被（かぶ）り童子五六人剣を
抜きてこれとともに舞うなり。笛の調子高
く歌は低くして側（かたわら）にあれども
聞きがたし。日は傾きて風吹き酔いて人呼
ぶ者の声も淋（さび）しく女は笑い児
（こ）は走れどもなお旅愁をいかんともす
る能（あた）わざりき。盂蘭盆（うらぼ
ん）に新しき仏ある家は紅白の旗を高く揚

(あ)げて魂(たましい)を招く風(ふう)あり。峠(とうげ)の馬上において東西を指点するにこの旗十数所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかかりそめに入りこみたる旅人とまたかの悠々(ゆうゆう)たる靈山とを黄昏(たぞがれ)は徐(おもむろ)に來たりて包容し尽したり。

遠野郷には八ヶ所の観音堂あり。一木をもつて作りしなり。この日報賽(ほうさい)の徒多く岡の上に灯火見え伏鉦(ふせがね)の音聞えたり。道ちがえの叢(くさむら)の中には雨風祭(あめかぜまつり)の藁人形(わらにんぎょう)あり。あたかもくたびれたる人のごとく仰臥(ぎようが)してありたり。以上は自分が遠野郷にてえたる印象なり。

思うにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。いかに印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狭隘(きょうがい)を

い）なる趣味をもつて他人に強（し）いんとするは無作法（ぶさほう）の仕業（しわざ）なりという人あらん。されどあえて答う。かかる話を聞きかかる処（ところ）を見てきてのちこれを人に語りたがらざる者果（はた）してありや。そのような沈黙にしてかつ慎（つつし）み深き人は少なくとも自分の友人の中にはあることなし。いわんやわが九百年前の先輩（せんぱい）『今昔物語』のごときはその当時においてすでに今は昔の話なりしに反しこれはこれ目前の出来事なり。たとえ敬虔（けいけん）の意と誠実の態度とにおいてはあえて彼を凌（しの）ぐことを得（う）するという能わざらんも人の耳を経（ふ）ること多からず人の口と筆とを脩（やと）いたること甚だ僅（わずか）なりし点においては彼の淡泊無邪気なる大納言殿（だいなごんの）かえって来たり聴くに値せり。近代の御伽百

物語（おとぎひやくものがたり）の徒に至りてはその志（こころざし）やすでに陋（ろう）かつ決してその談の妄誕（もうたん）（もうたんに）にあらざること誓（ちか）いえず。窃（ひそか）にもってこれと隣を比するを恥とせり。要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも立派なる存在理由ありと信ず。ただ鏡石子は年わずかに二十四五自分もこれに十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生まれながら問題の大小をも弁（わ）きまえず、その力を用いるところ当（とう）を失えりという人あらば如何（い）かん）。明神の山の木兎（みみずく）のごとくあまりにその耳を尖（とが）らしあまりにその眼を丸くし過ぎたりと責（せ）むる人あらば如何。はて是非もなし。この責任のみは自分が負わねばならぬなり。おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

柳田国男

「#改ページ」

題目（下の数字は話の番号なり、ページ数にはあらず）

地勢

一、五、六七、一一一

神の始

二、六九、七四

里の神

九八

カクラサマ

七二―七四

ゴンゲサマ

一一〇

家の神

一六

オクナイサマ

一四、一五、七〇

オシラサマ

六九

ザシキワラシ

一七、一八

山の神

八九、九一、九三、一〇二、一〇七、一〇

八

神女

二七、五四

天狗

二九、六二、九〇

山男

五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二

山女

三、四、三四、三五、七五

山の靈異

三二、三三、六一、九五

仙人堂

四九

蝦夷の跡

一一二

塚と森と

六六、一一一、一一三、一一四

姥（うば）神

六五、七一

館（たて）の址

六七、六八、七六

昔の人

八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

家のさま

八〇、八三

家の盛衰

一三、一八、一九、二四、二五、三八、六

三

マヨイガ

六三、六四

前兆

二〇、五二、七八、九六

魂の行方

二二、八六―八八、九五、九七、九九、一

〇〇

まぼろし

二三、七七、七九、八一、八二

雪女

一〇三

川童

五五―五九

猿の経立（ふったち）

四五、四六

猿

四七、四八

狼（おいぬ）

三六―四二

熊

四三

狐

六〇、九四、一〇一

色々の鳥

五一―五三

花

三三、五〇

小正月の行事

一四、一〇二―一〇五

雨風祭

一〇九

昔々

一一五―一一八

歌謡

一一九

「#改丁」